

参考資料

1 人虎伝

李景亮 撰

「国訳漢文大成 文学部第十二卷 晋唐小説」所収
* 会話文には「」を付した。

隴西りゆうせいの李徴りは、皇族の子にして號略くわうりやくに家す。徴少わうくして博学、善よく文を属しよくす。弱冠じやくくわん、州府貢しゆふきんに従ふ。時に名士と号す。天寶てんぽう十五載春、尚書右丞楊元しようじゆうやげんの榜下ぼうかに於て進士に登第とうだいす。後數年、調せられて江南尉くわんなんじに補す。徴性疎逸そいつ、才さいを持んで倨傲きよがうなり。跡あとを卑僚ひりょうに屈する能はず。常に鬱鬱うよくとして樂たのしみまず。同舍どうしゃの会既かいに酣たむけなる毎ごとに顧かへりみて其の群官ぐんくわんに謂いつて曰いははく、「生われは乃なほち君等きんとうと伍ひとを為なさんや。」と。其の僚友りょうゆう咸みなな之これに側目せきめくす。謝秩しやくちに及び則すなはち退ひきき歸かへりりて間適まんとくし、人と通とほぜざること歳余さいよに近ちかし。後衣食ごいじよくに迫おぼられ乃なほち東吳楚とういその間に遊あそび、以もつて郡国の長吏ちやうしに干まむ。楚人そじん其の声を聞きくこと固まより久ひさし。至いたるに及び皆館けいを開ひらいて以もつて俟まちつ。

宴遊えんゆう歡かんを極めて將まさに去さらんとすれば、悉ことごとく厚あつく遺おぼりて以もつて其の囊橐なうたうを實みす。徴吳楚いそに在あり且かつに歳余さいよならんとす。獲とる所の饋遺けいゐ甚おほく多おほし。西號略せいごうりやくに歸かへりり未なほだ舎いへに至いたらず、汝墳じよふんの逆旅ぎやくりよの中に於て忽たちち疾やまひを被かりて発狂はつきやうし、僕者ぼくしやを鞭撻むちうたつ。其の苦くるしみしみに勝からず。是こゝに於て旬余じゆんよ疾やまひ益ますます甚おほし。何いもなく夜狂走やきやうそうし其の適あく所ところを知らず。家僮かぢゆう其の去あを跡あとねて之これを伺うかがふ。月つきを尽つくくして徴竟ていけいに回かへりらず。是こゝに於て僕者ぼくしや其の乘馬せうばを驅かり其の囊橐なうたうを挈たへて遠とほく通とほ去さる。

明年めいねんに至いたりて陳郡ちんくんの袁修えんしゆ、監察御史かんさつじを以もつて、詔しよくを奉たじて嶺南りやうなんに使つかひし、伝でんに乘のりりて商於かうの界かゝりに至いたり、晨あしたに將まさに去さらんとす。其こゝに於て曰いははく、「道みちに虎あり、暴あにして人を食くふ。故ゆゑに此こゝに途みちする者は、昼ひるにあらざれば敢あて進むなし。今尚早いまはし。願ねがはくは、且かつらく車を駐とどめ、決けつして前まへむべからず。」と。修怒しゆりて曰いははく、「我われは天子てんしの使つかひにして後あと、騎極きごくめて多おほし。山沢さんたくの獸能けうく害がいを為なさんや。」と。遂すなはち駕がを命めいじて行いく。去さりて未なほだ一里いちりを尽つくくさざるに果はたして虎あり、草中そうちゆうより突とりて出でづ。修驚しゆくこと甚おほし。俄にに虎身こを草中そうちゆうに匿かくし、人声にんせいにて言いつて曰いははく、「異いなるかな、幾ほとんど我が故人こじんを傷きずけんとせり。」と。修其こゝの音こゑを聆きくに李徴りなるものに似にたり。修昔徴しゆせきていと同じく進士しんしの第だいに登のぼり、分ぶん極めて深ふかし。別わかれて年としあり、忽たちち其の語ことばを聞き既いに驚おどき且かつつ異いんで測はかるなし。遂すなはち問とひて曰いははく、「子こを誰たれとかなす。豈あた故人こじん隴西りゆうせい子こにあらずや。」と。虎呼こ吟いんすること數聲すうせい、嗟泣さなする状あはの若ごとし。已すでにして修しゆに謂いつて曰いははく、「我われは李徴りなり。」と。修乃すなはち馬うまより下くだりて曰いははく、「君何きみなにに由よりて此こゝに至いたれる。且かつつ修始しゆめ君と場屋ぢやうゐを同おなじくすること十じゆ余年じゆねん、情好じやうこう歡かんすること甚おほしく、他友たゆうに愈よれり。意いはざりき吾われれ先まづ仕し路ろに登のぼらんとは、君亦きみまた繼ついで科選かせんに捷あつ。睽問けいもん言笑げんせう、時ときを歴ふること頗おほる久ひさし。傾風結想けいふうけつしやう、渴あして飲のむ待まちつが如ごとし。幸あひに出でて使つかひするに

因り此に君に遇ふを得たり。而るに乃ち自ら草中に匿るるは、豈故人
疇昔の意ならんや。」と。虎曰はく、「吾れ已に異類となる。使吾君が
形を見れば、則ち且に畏怖して之を惡まん。何ぞ疇昔をこれ念ふに假
あらんや。然りと雖も君遽に去るなく、少しく款曲を尽くすを得ば、
乃ち我の幸ひなり。」と。修曰はく、「我素と兄を以て故人と別ふ。願
はくは拜礼を展べん。」と。乃ち再拜す。虎曰はく、「我足下と事ふて
より音容曠阻すること且つ久し。僕夫恙なきを得たるか、官途淹留を
致さざるか。今又何に合適く。向者君二吏あり。驅りて前み、駅隸印
囊を挈へて以て導くを見たり。庸ぞ御史となりて出で使ひするにあら
ざらんや。」と。修曰はく、「近者幸ひに御史の列に備はるを得、今使
ひを嶺南に奉ず。」と。虎曰はく、「吾子文学を以て身を立て、位朝序
に登る、盛んなりと謂ふべし。況んや憲台は清峻百揆を分糾す。聖明
慎んで扱び、尤も人に異なり。心に故人の此の地に居るを喜ぶ。甚だ
賀すべし。」と。修曰はく、「往昔吾れ執事と同年に名を成し、交契深
密なること常友に異なれり。声容間阻りてより去日流るるが如し。風
儀を想望して心目俱に断ゆ。意はざりき今日君が旧を念ふの言を獲ん
とは。然りと雖も執事何為れぞ我を見ずして自ら草木の中に匿るる。
故人の分、豈是の如くなるべけんや。」と。虎曰はく、「我れ今人たら
ず、安んぞ君を見るを得んや。」と。修曰はく、「願はくは其の事を
詳にせん。」と。

虎曰はく、「我が前身呉楚に客たり。去歳方に還る。道汝墳に次り
忽ち疾に墮りて発狂し、夜戸外に吾が名を呼ぶ者あるを聞く。遂に声
に応じて出で、山谷の間を走り、覺えず左右の手を以て地を攫みて歩
す。是れより心愈狼、力愈倍せるを覺ゆ。其の臆體を視るに及びて
は則ち毛の生ぜるあり。心甚だ之を異とす。已にして溪に臨みて影を

照らせば已に虎と成れり。悲慟すること良久し。然れども尚ほ生物を
攫みて食らふに忍びず。既に久しく飢ゑて忍ぶべからず。遂に山中の
鹿豕羶塊を取りて食に充つ。又久しくして諸獸皆遠く避けて得る所な
し。飢益々甚し。一日婦人あり山下より過ぐ。時正に餓迫る。徘徊す
ること数四、自ら禁ずる能はず遂に取りて食らふ。殊に甘美なるを覺
ゆ。今其の首飾猶ほ巖石の下に在り。是れより冕して乗る者、徒して
行く者、負ひて趨る者、翼ありて翔ける者、露ありて馳する者を見れ
ば、力の及ぶ所悉く擣へて之を阻し、立ちどころに尽くす。率ね以て
常となす。妻孥を念ひ朋友を思はざるにあらざれども、ただ行ひの神
祇に負けるを以て、一旦化して異獸となり、人に嗣づるあり。故に分
として見えず。嗟乎我と君とは同年に登第し、交契素より厚し。君は
今日天憲を執り親友に耀かす。而も我は身を林藪に匿し永く人實を謝
る。躍りて天を呼び俛して地に泣くも、身毀れて用ひられず。是れ果
たして命なるか。」と。因つて呼吟咨嗟し殆ど自ら勝へず。遂に泣く。
修且つ問ひて曰はく、「君今既に異類となる、何ぞ尚ほ能く人言する
や。」と。虎曰はく、「我今形變じて心悟むるのみ。此の地に居りて
より歲月の多少を知らず、ただ草木の榮枯を見るのみ。近日絶えて過
客なく、久しく飢ゑて堪へ難し。不幸にして故人に唐突し、慙惶する
こと殊に甚し。」と。修曰はく、「君久しく飢うれば某に余馬一疋あり、
留めて以て贈となさば如何。」と。虎曰はく、「吾が故人の俊乘を食
らふは、何ぞ吾が故人を傷つくるに異ならんや。願はくは此れを反さ
ん。」と。修曰はく、「食籃中に羊肉数斤あり、留めて以て贈となさ
ば可ならんか。」と。曰はく、「吾れ方に故人と旧を道ふ。未だ食らふ
に暇あらず。君去るとき則ち之を留めよ。」と。又曰はく、「我君と
真に忘形の友なり、而して我將に託する所あらんとす、可ならん

か。」と。僂曰はく、「平昔の故人なり、安んぞ不可なるあらんや。恨むらくは未だ何如事なるかを知らず、願はくは尽く之を教へよ。」と。虎曰はく、「君我に許さずんば我何ぞ敢て言はん、君既に我に許せり、豈隠すあらんや、初め我逆旅の中に於て疾の為に発狂し、既に荒山に入る。而して僕若我が乗馬衣囊を驅り悉く逃げ去る。吾が妻孥尚ほ號略に在り。豈我が化して異類となれるを知らんや。君南より回らば為に書を齎して吾が妻子を訪ひ、ただ云へ、我已に死せりと。今日の事を言ふなかれ。之を志せ。」と。乃ち曰はく、「吾れ人世に於て且つ資業なし。子あるも尚ほ稚し。固より自ら謀り難し。君の位周行に列り、素より風義を秉る。昔日の分、豈他人能く右らんや。必ず望む。其の孤弱を念ひ、時に之を賑卹し、道途に殍死にせしむるなくんば、亦恩の大なるものなり。」と。言ひ已りて又悲泣す。僂も亦泣きて曰はく、「僂と足下と休戚同じ。然らば則ち足下の子は亦僂の子なり。当に力めて厚命に副ふべし。又何ぞ其の至らざるを虞れんや。」と。

虎曰はく、「我旧文数十篇あり。未だ代に行はれず。遺藁ありと雖も当に尽く散落すべし。君我が為に伝録せば、誠に文人の口闕に列する能はざるも、然も亦子孫に伝ふるを貴ふなり。」と。僂即ち僕を呼び筆を命じ、其の口に随つて書せしむ。二十章に近し。文甚だ高く、理甚だ遠し。閱して歎ずること再三に至る。虎曰はく、「此れ吾が平生の業なり。又安んぞ寝めて伝へざるを得んや。」と。既にして又曰はく、「吾れ詩一篇を為らんと欲す。蓋し吾が外異なりと雖も、中異なる所なきを表せんと欲す。亦以て吾が懷を追ひて吾が憤りを癒べんと欲するなり。」と。僂復た吏に命じ筆を以て之に授けしむ。詩に曰はく、

偶狂疾に因つて殊類と成る。災患相仍つて逃るべからず。今日
は爪牙誰か敢へて敵せんや。当時は声跡共に相高かりき。我は異
物と為りて蓬茅の下にあれども、君は已に輜に乗りて氣勢豪なり。
此の夕べ溪山明月に對し、長嘯を成さずして但だ嘯を成すのみ。

僂之を覽て驚きて曰はく、「君の才行我之を知れり。而も君の此に至れるは、君平生恨むあるなきを得んや。」と。虎曰はく、「二儀の物を造る、固より親疎厚薄の間なし。其の遇ふ所の時、遭ふ所の数の若きは、吾れ又知らざるなり。噫顔子の不幸再有の斯の疾、尼父嘗て深く之を歎せり。若し其の自ら恨む所を反求せば、即ち吾れ亦之あり。定めて此に因るを知らざらんや。吾れ故人に遇ふ。則ち自ら匿す所なし。吾れ嘗て之を記す。南陽の郊外に於て嘗て一孀婦に私す。其の家竊に之を知り、常に我を害せんとの心あり。孀婦是れより再び合ふを得ず。吾れ因つて風に乗じて火を縦ち、一家数人尽く之を焚殺して去る。此を恨みとなすのみ。」と。虎又曰はく、「使ひして回るの日、幸ひに道を他郡に取れ、再び此の途に遊ぶなかれ。吾れ今日尚ほ悟むるも一日に都て酔はば則ち君此を過ぐるも、吾れ已に省せず、將に足下を齒牙の間に碎かんとす。終に士林の笑ひと成らん。此吾が切祝なり。君前み去ること百余步、小山に上り下視さば尽く見えん。此に將に君をして我を見せしめん」とす。勇を矜らんと欲するにあらず。君をして見て復た再び此を過ぎざらしめんとなり。則ち吾が故人を待つ所の薄からざるを知らん。」と。復た曰はく、「君都に還り吾が友人妻子を見るも、慎んで今日の事を言ふなかれ。吾久しく使旆を留め王程を稽滞せんことを恐る。願はくは子と訣れん。」と。別れを叙すること甚だ久し。僂乃ち再拜して馬に上り草茅の中を回視し、悲泣聞くに忍びざる所なり。僂亦大いに働き行くこと数里、嶺に登りて之を看れば、則ち

虎林中より躍り出でて咆哮し、巖谷皆震ふ。後南中より回る。乃ち他道を取り復た此に由らず。使ひを遣はし書及び賻贈の礼を持ち徴が子に計せしむ。月余にして徴が子號略より京に入り、慘に詣りて先人の柩を求む。慘已むを得ず具に其の伝を疏し、遂に己が俸を以て均給す。徴が妻子飢凍を免る。後、官兵部侍郎に至る。